

小、中、高校生の自己肯定感に関する研究

久芳 美恵子 齊藤 真沙美* 小林 正幸**

I. 問題と目的

人との適切なかかわりがもてず、対人関係トラブルに発展したり、問題行動や不適応につながったりするという子どもの問題については、ソーシャル・スキルや感情コントロールの稚拙さという視点からも度々指摘されてきている(小林⁷⁾;大河原¹⁷⁾など)。

また、これまでの研究において、思春期・青年期における自己肯定感の重要性が明らかにされてきている。松井・佐藤¹⁴⁾や松井¹²⁾は、中学生の進路の問題と絡めて、伊藤³⁾は、逸脱行為という視点から調査を行い、それぞれ自己肯定感を高めることは、適応促進につながるということを示している。

自己肯定感における性差・学年差の検討についても、これまでに様々な研究がなされてきている。性差については、女子よりも男子の方が自己肯定感が高いことを示唆する研究は多い(山本ら²¹⁾、久芳・竹村¹⁰⁾など)。しかし、小学生を対象とした久芳・齊藤・小林⁹⁾の研究においては性差は確認されていない。

また、宮沢¹⁵⁾の女子中学生を対象とした自己受容性に関する縦断的な研究によれば、自己承認が学年とともに低下することが指摘されている。しかし、小学生、高校生も含めて学年差の検討をしている研究はあまり見受けられない。

一方、適度に自己受容している人は対人関係が円滑に進められ、積極的に良好な対人関係を構築できることを明らかにしている研究は多い(名城¹¹⁾、加藤⁶⁾など)。竹田・倉戸¹⁹⁾は、小学生を対象として、自尊感情が学校内不安に及ぼす効果について検討し、自己肯定感の高い群では学校内不安が

生じにくいという結果を得ている。久芳・竹村¹⁰⁾および久芳・齊藤・小林^{8) 9)}は、高校生、中学生、小学生それぞれにおいて、自己肯定感が高い方が人とのかかわりもよいことを示している。また、飯島²⁾は、良好な友人関係が自己肯定感を高めることを指摘している。

本研究においては、個人間の相互作用を基礎とする持続的、心理的な結びつきとしての「対人関係」と、対人場面における対人行動としての「ソーシャル・スキル」を包括する概念として「人とのかかわり」を定義し、用いることとする。

また、自己肯定感と自己受容性は類似の概念であるが、本研究においては自己肯定感を「自分自身のあり方を概して肯定する気持ち」と捉え、理想自己と現実自己のずれをうまく調節しながら、ありのままの自己を受け容れるという自己受容性とは区別することとする。

これまでの研究において、小学生から高校生を対象として自己肯定感を扱ったものは、大学生や成人を対象としたものと比較して少なく、対人関係における規定要因を検討しているものはあまり見受けられない。

そこで本研究では、小・中学生、高校生を対象とし、以下の2点を検討することを目的とする。

- ①自己肯定感の性差、学年差を検討する。
- ②自己肯定感を規定する人とのかかわりの要因を検討する。

II. 方法

対 象：東京都の公立小学校9校に通う小学生(小4~小6) 1670名、公立中学校6校に通う中

学生(中1~中3)2506名、公立高校2校に通う高校生(高1~高3)1258名、計5434名。学年、性別の構成は、Table1に示した通りである。

手続き：以下の4種類から構成される質問紙調査を実施した。調査用紙は無記名で、学年と性別の記入を求めた。調査は、2000年6月~2003年7月に担任教師の監督のもと、各学級で一斉に行われた。

各尺度は、久芳ら⁸⁾⁹⁾によって使用された8項目、4件法で、合計32項目である。

①「友達とのかかわり」尺度

友達とのつきあい方の認識について回答を求め

るもので、中学生は「積極的かかわり」、「群れ回避」、「気づかい」の3因子(久芳ら⁸⁾)、小学生は「積極的かかわり」「気づかい」の2因子(久芳ら⁹⁾)から成る。

②「家族とのかかわり」尺度

家族とのつきあい方の認識について回答を求めらるもので、中学生、小学生ともに1因子から成る(久芳ら⁸⁾⁹⁾)。

③「先生とのかかわり」尺度

先生とのつきあい方の認識について回答を求めらるもので、中学生、小学生ともに「親近感」、「敬意」の2因子から成る(久芳ら⁸⁾⁹⁾)。

④「自己肯定感」尺度

Table 1 対象児童・生徒の学年別・男女別構成

	小4	小5	小6	中1	中2	中3	高1	高2	高3	合計
男子	295	292	287	462	504	372	211	212	185	2820
女子	269	255	272	400	435	333	207	201	242	2614
合計	564	547	559	862	939	705	418	413	427	5434

Table 2 「自己肯定感」尺度の因子分析結果

質問項目	因子	共通性
4 自分には良いところがある	.791	.626
8 今の自分が好きだ	.674	.454
7 自分には「自分らしさ」がある	.662	.439
3 人に好かれている	.638	.407
5 自分には誰にも負けないもの(こと)がある	.635	.403
6 容姿(顔やスタイル)に満足している	.601	.362
2 運動ができる	.497	.247
1 成績がよい	.472	.223
固有値	3.161	3.161
寄与率(%)	39.51	

(主因子法)

自分自身をどの程度肯定的に捉えているかを測定するために、自己に関する評価を求めるもので、中学生、小学生ともに1因子から成る(久芳ら⁸⁾⁹⁾。

III. 結果と考察

1. 「自己肯定感」の性差・学年差の検討

8項目からなる「自己肯定感」尺度に対する全被調査者の反応について、主因子法による因子分析を行った。その結果、久芳ら⁸⁾⁹⁾の研究同様、8項目、1因子が抽出された(Table2)。「自己肯定感」の尺度得点(尺度の平均得点)を算出した。その際、自己肯定感が高い(「とてもそう」である)ほど、得点が高くなるように換算して、算出した。

被調査者の性別、学年別の「自己肯定感」尺度得点の平均値と標準偏差をそれぞれ算出した(性別、学年別の平均値についてはFigure1参照)。

自己肯定感の性差、学年差を検討するために、「自己肯定感」の下位尺度得点を従属変数として、性差、学年差の2要因分散分析を行った。結果は、Table3-1に示した通りである。交互作用が有意であったため(F(8,5412)=3.625, p<.001, MSe=.324)、単純主効果の検定を行った(Table3-2)。

分析の結果、性差については、中2以上において女子よりも男子の方が有意に自己肯定感が高いという結果が得られた。学年差については、男子では高1・高2・高3・中3・中2・中1・小6<小5・小4、高1・高2<小6という有意差が(F(8,2808)=18.938, p<.001, MSe=.350)、女子では高2・高1・高3・中3・中2<

Table 3-1 「自己肯定感」の性差、学年差の分散分析・多重比較結果

性差	学年差	交互作用	MSe
F(1,5412)=44.524****	F(8,5412)=63.386****	F(8,5412)=3.625****	.324
女子<男子	高2・高1・高3・中3・中2<中1・小6<小5<小4 高2<中2		

****p<.001, ***p<.005, **p<.01, *p<.05

Table 3-2 「自己肯定感」の性差の分散分析・多重比較結果

性差	性差	性差
小4 F(1,562)=1.762 n.s.	中1 F(1,860)=1.391 n.s.	高1 F(1,414)=2.382* 女子<男子
小5 t(545.000)=1.363 n.s.	中2 F(1,937)=4.765**** 女子<男子	高2 F(1,411)=5.152**** 女子<男子
小6 F(1,557)=1.862 n.s.	中3 F(1,703)=3.655**** 女子<男子	高3 t(1,423)=2.375* 女子<男子

****p<.001, ***p<.005, **p<.01, *p<.05

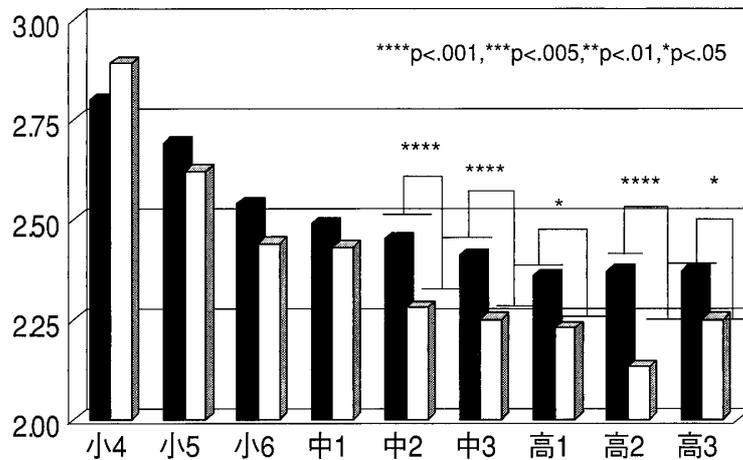


Figure 1 自己肯定感の性別・学年別平均値

■ 男子平均 □ 女子平均

中1・小6<小5<小4、高2<中2という有意差が確認された ($F(8, 2604) = 49.935, p < .001, MSe = .295$) (Figure1)。

Buhler, Ch.¹⁾は、青年期前期を否定期、青年期後期を肯定期とし、否定期の特徴の1つとして反抗をあげている。しかしその一方で、自分自身に対する意気消沈、憎しみなどの形をとることもあることを指摘しており、アイデンティティを確立する前段階として現実の自分の姿に向き合い、理想の姿とのギャップに徐々に直面する時期であるともいえるのではないだろうか。

男子における小6以降の自己肯定感の低下は思春期に入るこの時期が、上述の否定期に当たることを示唆するものと考えられる。

女子においても同じような経過をたどってはいるものの、小4から小6までに急激な低下を示し、その後も中2でさらに低下をするというように、男子と比較して、より急激な段階的变化をみてとることができる。

松井・奈良井¹³⁾や松井¹²⁾の中学生の進路に絡めての研究においては、中3になると、進路成熟得点が増加し、進路選択に対する自己効力感得点は、特にもともと効力感の低い群において上昇するとされている。また、中2で一旦低下した自己効力感が中3で上昇するという結果も得られている。本研究に

おいても、中3・高3において自己肯定感の下げ止まり、もしくは若干の上昇傾向が見てとれ、進路選択に向き合うことが、自分自身と向き合い、自己を確立する機会になっていると捉えることもでき、このことが自己肯定感に影響を及ぼしている可能性が考えられる。また、小6における中学校受験は、一部の児童だけが直面するものであり、中3・高3とは異なった形で自己肯定感に影響していることも考えられる。

中2以降に有意な性差が確認されたことには、上述のように、発達に伴って生じる自己肯定感の低下の様相が男女で異なることが影響を及ぼしていると考えられる。久芳・竹村¹⁰⁾は、自己肯定感と性受容の関連性も指摘している。伊藤⁴⁾は、自己の性の受容の発達の推移を提示し、男女ともに小学校高学年から性を受容している者が急激に減り始め、特に女子では中2で4割を切るまでになることを示している。この女子における性受容の急激な低下は、自己肯定感の低下と重なる部分もあり、このことが自己肯定感に影響を及ぼしているとも推測される。

また、女子においてみられる発達に伴った人のかかわりの特徴的な変化が、これに影響を及ぼしている可能性もあり、これについては後述することとする。

2. 「自己肯定感」の規定要因の検討

高校生の人とのかかわりに関する尺度について因子分析を行った。その際、分析の手法については中学生、小学生を対象とした久芳ら^{8) 9)}の研究における各尺度の分析を参考にして行った。結果は、

Table4-1～Table4-3に示した通りである。

「友達とのかかわり」尺度については、中学生と同様の因子構造で8項目、3因子が抽出され、第1因子は「積極的かかわり」(以下「積極的」、3項目)、第2因子は「群れ回避」(2項目)、第3因子は「気づ

Table 4-1 高校生「友達とのかかわり」尺度の因子分析結果

質問項目	因子			共通性
	積極的	群れ回避	気づかい	
3 異性の友人と気軽に話をする	.788	-.189	.108	.621
1 自分から話しかけていく	.772	-.012	-.029	.639
8 友人になったら、その関係は長く続く方だ	.581	-.003	.260	.367
5 グループでいるより、少人数の方が付き合いやすい	.027	.825	.138	.689
4 友人といるより、1人の方が気持ちが落ち着く	-.214	.793	.001	.658
2 友人の意見や行動に合わせる	.070	-.054	.781	.634
6 頼み事をされると、嫌でも断れない事がある	.077	.116	.687	.474
7 相手や場面によって態度や考え方が変わる	.212	.328	.491	.345
固有値	1.751	1.569	1.107	
寄与率(%)	21.886	19.611	13.841	
因子間相関係数(r)	積極的	-.070	.152	
	群れ回避		.108	

(主成分分析、プロマックス法)

Table 4-2 高校生「家族とのかかわり」尺度の因子分析結果

質問項目	因子	共通性
5 親に学校でのことを話す	.790	.608
2 親(父または母)と友達のように会話する	.752	.565
3 親に悩み事を話す	.731	.535
4 親を信頼している	.672	.452
6 自分からは話をしない方だ	-.651	.424
1 朝や寝る前に家族に挨拶をする	.635	.403
8 家の手伝いをする	.495	.244
7 きょうだいにいろいろな話を	.494	.244
固有値	3.493	3.493
寄与率(%)	43.665	

(主成分分析)

Table 4-3 高校生「先生とのかかわり」尺度の因子分析結果

質問項目	共通性		
	敬意	親近感	
8 敬語で話をする	.771	-.362	.623
6 先生の話は注意深く聞いている	.771	-.042	.584
5 先生を信頼している	.623	.334	.576
2 会った時には挨拶をする	.531	.297	.426
1 先生とよく話をする方だ	.138	.773	.656
3 悩みや不安を聞いてもらうことがある	.097	.692	.513
4 自分のことを話にくい	.296	-.645	.433
固有値	2.298	1.514	
寄与率(%)	32.822	21.625	
因子間相関係数(r)	敬意	.184	
削除項目	(主成分分析、プロマックス法)		
7 わからないことは質問する			

かい」(3項目)と命名した(久芳ら⁸⁾)。

「家族とのかかわり」尺度については、中学生、小学生と同様に8項目、1因子が抽出された(久芳ら⁸⁾⁹⁾)。

「先生とのかかわり」尺度については、7項目、2因子が抽出され、第1因子は「敬意」(4項目)、第2因子は「親近感」(3項目)と命名した。中学生の因子分析結果とは項目に若干の相違が確認されたが、抽出された因子構造は類似していた(久芳ら⁸⁾)。

「自己肯定感」を規定する人とのかかわりの要因を検討するため、「自己肯定感」、「友達とのかかわり」「家族とのかかわり」、「先生とのかかわり」のそれぞれの因子得点を算出し、校種ごとに性別、学年別に「自己肯定感」の因子得点を従属変数、「友達とのかかわり」、「家族とのかかわり」、「先生とのかかわり」のそれぞれの因子得点を説明変数として重回帰分析を行った。結果は、Table5-1~Table5-3に示した通りである。

小学生全体では友達への「積極的かかわり」($\beta=$

210, $p<.001$)、先生への「敬意」($\beta=.093, p<.05$)が自己肯定感を左右しているという結果が得られた。しかし、男子と小4、小5においては先生への「敬意」の影響はみられなかった($\beta=.025, n.s.$; $\beta=.028, n.s.$; $\beta=-.044, n.s.$)。また、女子においては友達への「気づかい」が自己肯定感に影響を及ぼしているという結果が見出された($\beta=.096, p<.05$)。

中学生全体においてはほぼすべてのかかわりが自己肯定感を左右しており、「群れ回避」は負の影響を及ぼしているという結果が得られた(友達「積極的」 $\beta=.360, p<.001$; 友達「群れ回避」 $\beta=-.052, p<.05$; 友達「気づかい」 $\beta=-.039, p<.10$; 「家族」 $\beta=.190, p<.001$; 先生「親近感」 $\beta=.106, p<.001$; 先生「敬意」 $\beta=.154, p<.001$)。特に男子と中1について「群れ回避」におけるこの傾向がみられた($\beta=-.071, p<.05$; $\beta=-.078, p<.05$)。一方、女子においては、この傾向は確認されず($\beta=-.042, n.s.$)、友達への「気づかい」が自己肯定感に負の影響を及ぼしているという特徴があることが明らかになった($\beta=-.067, p<.05$)。

Table 5-1 小学生の重回帰分析結果

説明変数	全体	男子	女子	小4	小5	小6
	β	β	β	β	β	β
友達積極的	.210***	.237****	.165***	.200***	.198***	.232***
友達気づかい	.008	-.075	.096*	-.003	.042	-.010
家族	-.031	.081	-.010	-.081	.070	-.120+
先生親近感	.076+	.064	.112+	.123	.111	-.037
先生敬意	.093*	.025	.174***	.028	-.044	.204***
R	.283***	.291****	.356***	.254**	.297****	.281****
adj.R ₂	.077	.074	.117	.049	.071	.062

****p<.001, ***p<.005, **p<.01, *p<.05, +p<.10. adj.R₂:自由調節済みの決定係数

Table 5-2 中学生の重回帰分析結果

説明変数	全体	男子	女子	中1	中2	中3
	β	β	β	β	β	β
友達積極的	.306***	.274****	.338****	.318****	.274****	.319****
友達群れ回避	-.052*	-.071*	-.042	-.078*	-.005	-.077+
友達気づかい	-.039+	-.018	-.067*	-.068+	-.004	-.055
家族	.109****	.157****	.150****	.113**	.122***	.104*
先生親近感	.106***	.085**	.119****	.150****	.138****	.009
先生敬意	.154****	.136****	.140****	.143****	.163****	.148***
R	.470***	.461****	.523****	.519****	.471****	.418****
adj.R ₂	.219	.208	.269	.262	.215	.166

****p<.001, ***p<.005, **p<.01, *p<.05, +p<.10. adj.R₂:自由調節済みの決定係数

Table 5-3 高校生の重回帰分析結果

説明変数	全体	男子	女子	高1	高2	高3
	β	β	β	β	β	β
友達積極的	-.001	-.004	-.010	.058	.085	-.116*
友達群れ回避	-.059+	-.009	-.076+	.001	-.085	-.108*
友達気づかい	.071*	.083+	.066	.031	.083	.102+
家族	-.061+	-.140**	-.087+	-.183**	-.022	.001
先生親近感	-.009	-.040	.035	-.050	.003	.001
先生敬意	-.069*	-.083+	-.043	-.046	-.105+	-.045
R	.128**	.201***	.132	.208*	.171	.178+
adj.R ₂	.011	.029	.006	.026	.013	.015

****p<.001, ***p<.005, **p<.01, *p<.05, +p<.10. adj.R₂:自由調節済みの決定係数

高校生全体においては、友達への「気づかい」が自己肯定感を左右し ($\beta=.071$, $p<.05$)、先生への「敬意」は負の影響を及ぼしているという結果が得られた ($\beta=-.069$, $p<.05$)。男子と高1においては「家族とのかかわり」($\beta=-.140$, $p<.01$; $\beta=-.183$, $p<.01$) が、高3では友達への「積極的にかかわり」($\beta=-.1160$, $p<.05$)、「群れ回避」($\beta=-.108$, $p<.05$) がいずれも負の影響を及ぼしているという結果が得られた。しかし、高校生においては他の校種と比較して有意な規定要因があまり見出されなかった。

校種ごとに比較すると、小学生から中学生にかけて人とかかわりが自己肯定感に与える影響力は強くなり、高校生になるとその影響はとて小さくなるといえる。したがって、特に中学生において「人とかかわりが良好である」という認識が自己肯定感に大きな影響を及ぼしていることが示唆されたといえよう。高校生においては多少の規定要因は確認されたものの、別の要因が大きな影響を与えていると考える方が妥当であるといえよう。

齋藤¹⁸⁾は、友人関係が3つの位相を経て発達していくという発達の観点に立脚し、「友人関係の発達段階の3段階モデル」を提示している。これによれば、小学校高学年ころにみられる友人関係の関係様式は「gang-relation」とされ、「外面的な同一行動による一体感を特徴とする関係様式」と定義されている。このことを本結果に照らして考えるならば、gangの関係様式が強くなる小学生においては、「積極的にかかわり」の影響力がとても大きな影響を及ぼしているといえる。女子における「気づかい」の影響については、中学生の結果と合わせて述べることにする。

中学生においても、gangの関係様式を好むと考えられる男子と中1では、群れを回避することが身体的な一体感を得られないということを意味していると考えられる。自ら回避することを選んでいる可能性があるにせよ、自己肯定感を低下させる形で影響を及ぼしていることが示唆された。

小学生女子においては友達への「気づかい」が自己肯定感を高める方に作用していたにも関わらず、中学生女子においては自己肯定感を低める方に作

用しているという一見矛盾した結果は得られた。

長沼・落合¹⁶⁾は、中学生から大学生を対象に調査を実施し、女子は男子に比べて嫌われないように気をつけて友達とつきあっていると述べている。また、東京都立多摩教育研究所²⁰⁾は、中学生女子においては、グループへのこだわりが強く、グループの維持に多くのエネルギーを費やしていることを明らかにしている。これらを考慮すると女子の友人関係においては、過剰な「気づかい」を強いられることが推測され、この傾向が自己肯定感を低下させる形で影響を及ぼしている側面もあると推測される。

一方、久芳⁹⁾の研究においては、小学生男子の「気づかい」は配慮のソーシャル・スキルとして人間関係を調整する意味があるとしている。前述の齋藤¹⁸⁾の「友人関係の発達段階の3段階モデル」によれば、「中学生ころにみられる、内面的な類似性の確認による一体感を特徴とする関係様式」は「chum-relation」とされている。小学生女子における本結果は、男子と比較し、早い時期からchumの関係様式を好む女子において、友達へ適度な「気づかい」ができることが自己肯定感を高める要因になっていると考えられる。しかし、この時点では「適度」であると考えられる「気づかい」が、小6になると負の影響となることが示されていることから(久芳⁹⁾)、次第に「過剰」な気づかいへと変化していくことが推察される。この友人関係における女子の特徴的な変化が、男子とは異なる自己肯定感の発達の推移に影響を及ぼしているとも考えられるのではないだろうか。

高校生における自己肯定感の規定要因については先述の通り、小・中学生と比較し、顕著な結果は得られなかった。しかし、全体として友達への「気づかい」が自己肯定感を高めるという結果は高校生に特徴的であり、これは友人関係の発達とともに、「気づかい」の在り方が変わってきていることの現れともいえるだろう。

これに加えて、高3では、友達との「積極的にかかわり」と「群れ回避」がいずれも自己肯定感に負の影響を及ぼしているという、相反するような結果が得られた。このことには進路という問題も絡んで、友人

関係の様式が発達的に変化していることが考えられる。齋藤¹⁸⁾が「peer-relation」と定義する「内面的にも外面的にも、互いに自立した個人としての違いを認め合う」という友人関係が発達に伴い台頭してくる可能性を考慮するならば、自分自身の将来を見据えるこの時期に、友達と適度な心地よい距離が保てることが必要であり、近すぎたり遠すぎたりすることは自己肯定感を低めることになるともいえるのではないだろうか。

男子と高1においては、家族とのかかわりが自己肯定感に負の影響を及ぼしているという結果が得られた。特に精神的にも物理的にも家族から自立することを望む時期にさしかかっていると考えられる男子において、逆に家族とのかかわりが強いことがこのような結果を招いているといえよう。また、高校に入学し、環境が大きく変化する高1の時期に同じような現象が確認されるのも、同様の理由によると考えられ、いずれもこの時期に家族とのかかわりが強すぎることは、自己肯定感の低下、不適応感のサインであるという相互作用的な解釈も可能だといえるのではないだろうか。

今後の課題

本研究結果から、特に高校生において、自己肯定感の規定要因として、人とかかわり以外の要因が大きく影響を及ぼしている可能性が大きいと考えられる。したがって、この要因については、より詳細な検討が必要であるといえるだろう。

また、松井・奈良井¹³⁾・松井¹²⁾は、進路選択と自己肯定感との関連を指摘しており、この傾向は本研究においても確認されたことから、細かく検討していくことが求められる。

前述のように、久芳・竹村¹⁰⁾は、自己肯定感と性受容の関連性も指摘しており、伊藤⁴⁾によれば、女子における性受容性は男子と比較し、急激に低下する。また、梶島⁵⁾は現代社会の変容に伴い女性の生き方が変化し、過剰なほど「自己実現」へ追いつめられており、子どもの自己肯定感・セルフエスティームを育てるには子どもと向き合う大人自身がそれ

を高める必要があるとしている。このような視点も含めて、子どもの自己肯定感の獲得を促す要因を明らかにしていくことが求められているといえよう。

引用文献

- 1) Bühler, Ch. (1967) *Das Seelenleben des Jugendlichen*. Stuttgart: Gustav Fischer Verlag. (原田茂訳 (1969) 青年の精神生活 協同出版)
- 2) 飯島俊治 (2005) 良好な友人関係が自己肯定感を高める 月刊学校教育, 19, 44-47.
- 3) 伊藤忠弘 (2000) 青年期の自尊感情と逸脱行動の関係 日本教育心理学会第42回総会論文集, 636.
- 4) 伊藤裕子 (2000) 青年期のジェンダー (特集:ジェンダーと現代社会) 教育と医学, 48, 229-235.
- 5) 梶島彩子 (2005) 子どもをめぐる自己肯定感・セルフエスティームについて 日本女子大学人間社会研究科紀要, 11, 71-85.
- 6) 加藤隆勝 (1977) 青年期における自己意識の構造 心理学モノグラフ, 14, 東京大学出版会
- 7) 小林正幸 (2003) 不登校児の理解と援助—問題解決と予防のコツ 金剛出版
- 8) 久芳美恵子・齊藤真沙美・小林正幸 (2005) 中学生の自己肯定感と人とかかわりとの関連について 東京女子体育大学紀要, 40, 19-28.
- 9) 久芳美恵子・齊藤真沙美・小林正幸 (2006) 小学生の自己肯定感と人とかかわりとの関連について 東京女子体育大学紀要, 41, 13-24.
- 10) 久芳美恵子・竹村美砂 (2004) 自己肯定感と人とかかわり 東京女子体育大学紀要, 39, 15-23.
- 11) 名城嗣明 (1961) 自己受容と他者受容の関係についての実験的研究 琉球大学教育学部研究集録, 5, 49-69.
- 12) 松井賢二 (2001) 中学生の学校適応と進路 (キャリア) の成熟, 自己肯定感との関係 (II) 新潟大学教育人間科学部紀要 (人間・社会科学編), 4, 237-247.

- 13) 松井賢二・奈良井啓子 (2001) 中学生の学校適応と進路(キャリア)の成熟, 自己肯定感との関係 新潟大学教育人間科学部紀要(人間・社会科学編), 3, 363-373.
- 14) 松井賢二・佐藤優子 (2000) 中学生の学校適応と進路(キャリア)の成熟, 自己肯定感との関係 新潟大学教育人間科学部紀要(人間・社会科学編), 3, 157-166.
- 15) 宮沢秀次 (1998) 女子中学生の自己受容性に関する縦断的研究 教育心理学研究, 36, 258-263.
- 16) 長沼恭子・落合良行 (1998) 同性の友達とのつきあい方からみた青年期の友人関係 青年心理学研究, 10, 35-47.
- 17) 大河原美以 (2004) 怒りをコントロールできない子の理解と援助-教師と親のかかわり 金子書房
- 18) 齋藤憲司 (1986) 思春期における友人関係の変化 東京大学大学院教育研究科修士論文
- 19) 竹田レイ子・倉戸ツギオ (2003) 自尊感情が学校内不安に及ぼす研究効果 日本心理学会第67回大会発表論文集, 1142.
- 20) 東京都立多摩教育研究所 (1999) 中学生の友人関係に関する研究-より良い生徒理解をめざして-
- 21) 山本ちか・氏家達夫・二宮克美・五十嵐敦・井上裕光 (2003) 中学生の社会的行動についての研究(4)-中学生の自己概念についての検討- 日本教育心理学会第45回総会論文集, 337.